

イラクへの自衛隊派兵に反対する

日本戦没学生記念会

12月9日、日本政府はついに自衛隊のイラク派遣基本計画を閣議決定した。

日本戦没学生記念会(わだつみ会)は、政府がブッシュ大統領に追随し、戦闘も予想される他国領土へ自衛隊を派兵することに強く反対し、その計画の撤回を求める。

本会は、先のアジア太平洋戦争において、学業半ばにして徴兵され、無念にも戦死した学徒兵の死を無駄にはしない。“わだつみの悲劇を繰り返すな”のよびかけのもとに、半世紀にわたって反戦平和運動を続けてきた。

戦没学生ばかりでなく、先の戦争で戦死したたくさんの方々の市民、農民、兵士たちはどんなにか愛する家族や恋人や友人とともに、精一杯、生を全うしたかったであろうか。そしてまた、残された家族や恋人や友人たちの悲しみは半世紀たってもなお消えることはない。しかも、振り返ってみれば、日本はアジア諸国の人びとに対して加害者であったのだ。その反省のつえに日本は、問題解決の手段として戦争や武力の行使を永久に放棄し、平和を恒久的なものとしていくことを誓ったのである。

本会は、毎年8月15日の敗戦の日と、学徒入営の12月1日を不戦の日として不戦の誓いを新たにしてきた。また、今年には学徒出陣「60周年にあたり、3月18日には、元学徒兵28人、賛同者635人による「平和木戦を世界にむけて訴える」声明を発表した。

自衛隊は、いかに取り繕おうとも、他国にとっては軍隊である。日本は、憎悪と恐怖と暴力の連鎖に足を踏み入れてはならない。殺してはならない、殺させてもならない。

先の戦争でアジア諸国に侵略した加害者であり、また、多くの戦死者を始め、沖縄戦や本土空襲、広島、長崎の原爆を受けた被害者であった日本の果たすべき役割は、戦闘を引き起こしかねない自衛隊派兵ではなく、武力によらない平和を世界に働きかけることである。

戦没学生は「俺の子供はもう軍人にはしない、軍人だけに」平和だ、平和の世界が一番だ」と書き残している(川島正、『新版 きけ わだつみのこえ』90ページ)。

日本の政策はこのような死者たちの遺志を受けて 諸国民のあいだの信頼を高め、武力によらない平和の創造に向けたものでなければならぬ。

2003年12月22日

日本戦没学生記念会 わだつみ会